

玉木田独步全集

第三卷

学習研究社

國木田獨步全集 第三卷 (第三回配本)

G 六四三〇三

昭和三十九年十月三十日第一刷發行
昭和四十四年八月十日第二刷發行◎

定價 千五百圓

著 者

國 木 田 獨 步

編 集 者

國 木 田 獨 步 全 集
編 纂 委 員 會

發 行 者

古 岡 秀 人
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

印 刷 者

矢 島 貞 雄
長野市西和田四七〇

發 行 所

株式會社 學 習 研 究 社

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
電 話 (七二〇) 一 一 一 一
振 替 東 京 一 四 二 九 三 〇

小

說

二

目 次

空知川の岸邊		七
酒中日記		二五
神の子		七
日の出		八
別天地		一〇一
非凡なる凡人		一三七
運命論者		一四三
馬上の友		一五五
惡魔		一六三
山の力		一三三
第三者		一四五
正直者		一七七
捕虜		一五七
女難		一三七

親　　子		三五三
一家内の珍聞		三六七
雪冤の刃		三八三
春　　の　　鳥		三九一
夫　　　　婦		四〇五
田舎教師		四三七
帽　　　　子		四四一
あの時分		四四九
號　　　　外		四六一
入　郷　記		四七三
戀を戀する人		四八三
肱の侮辱		五〇三
波　　の　　音		五二一

[illegible]

空知川の岸邊

余が札幌に滞在したのは五日間である、僅に五日間ではあるが余は此間に北海道を愛するの情を幾倍したのである。

我國本土の中でも中國の如き、人口稠密の地に成長して山をも野をも人間の力で平げ盡したる光景を見慣れたる余にありては、東北の原野すら既に我自然に歸依したるの情を動かしたるに、北海道を見るに及びて、如何で心躍らざらん、札幌は北海道の東京でありながら、満目の光景は殆ど余を魔し去つたのである。

札幌を出發して單身空知川の沿岸に向つたのは、九月二十五日の朝で、東京ならば猶は残暑の候でありながら、余が此時の衣裝は冬着の洋服なりしを思はゞ、此地の秋既に老いて木枯しの冬の間に迫つて居ることが知れるであらう。

目的は空知川の沿岸を調査しつゝある道廳の官吏に會つて土地の撰定を相談することである。然るに余は全く地理に暗いのである。且つ道廳の官吏は果して沿岸何れの邊に屯して居るか、札幌の知人何人も知らないのである、心細くも余は空知太を指して汽車に搭じた。

石狩の野は雲低く迷ひて車窓より眺むれば野にも山にも恐ろしき自然の力あふれ、此處に愛なく情なく、

見るとして荒涼、寂寞、冷厳にして且つ壯大なる光景は恰も人間の無力と儚さとを冷笑ふが如くに見えた。蒼白なる顔を外套の襟に埋めて車窓の一隅に黙然と坐して居る一青年を同室の人々は何と見たらう。人々の話柄は作物である、山林である、土地である、此無限の富源より如何にして黄金を握み出すべきかである、彼等の或者は饅頭の酒を傾けて高論し、或者は煙草をくゆらして談笑して居る。そして彼等多くは車中で初めて遇つたのである。そして一青年は彼等の仲間に加はらずたゞ一人其孤獨を守つて、獨り其空想に沈んで居るのである。彼は如何にして社會に住むべきかといふことは全然其思考の問題としたことがない、彼はたゞ何時も何時も如何にして此天地間に此生を托すべきかといふことをのみ思ひ悩んで居た。であるから彼には同車の人々を見ること殆ど他界の者を見るが如く、彼と人々との間には越ゆ可からざる深谷の横はることを感ぜざるを得なかつたので、今しも汽車が同じ列車に人々及び彼を乗せて石狩の野を突過してゆくことは、恰度彼の一生のそれと同じやうに思はれたのである。あゝ孤獨よ！彼は自ら求めて社會の外を歩みながらも、中心實に孤獨の感に堪えなかつた。

若し夫れ天高く澄みて秋晴拭ふが如き日であつたならば余が鬱屈も大にくつろぎを得たらうけれど、雲は益々低く垂れ林は霧に包まれ何處を見ても、光一閃だもないので余は殆ど堪ゆべからざる憂愁に沈んだのである。

汽車の歌志内の炭山に分るゝ某停車場に着くや、車中の大半は其處で乗換へたので残るは余の外に二人あるのみ。原始時代そのまゝで幾千年人の足跡をとどめざる大森林を穿つて列車は一直線に走るのである。灰色の霧の一團又一團、忽ち現はれ忽ち消え、或は命あるものゝ如く黙々として浮動して居る。

『何處までお出でゝすか。』と突然一人の男が余に聲をかけた。年輩四十幾千、骨格の逞ましい、頭髮の長生た、四角な顔、鋭い眼、大なる鼻、一見一癖あるべき人物で、其風俗は官吏に非ず職人にあらず、百姓にあらず、商人にあらず、實に北海道にして始めて見るべき種類の者らしい、則ち何れの未開地にも必ず先づ最も跋扈する山師らしい。

『空知太まで行く積りです。』

『道廳の御用で？』彼は余を北海道廳の小役人と見たのである。

『イヤ僕は土地を撰定に出掛けるのです。』

『ハハア。空知太は何處等を御撰定か知らんが、最早目星ところは無いやうですよ。』

『如何でしやう空知太から空知川の沿岸に出られるでしやうか。』

『それは出られましやうとも、然し空知川の沿岸の何處等ですか其が判然しないと……』

『和歌山縣の移民團體が居る處で、道廳の官吏が二人出張して居る、其處へ行くのですがね、兎も角も空知太まで行つて聞いて見る積りで居るのです。』

『さうですか、それでは空知太にお出になつたら三浦屋といふ旅人宿へ上つて御覽なさい、其處の主人がさういふことに明う御座いますから聞て御覽なつたら可うがす、どうも未だ道路が開けないので一寸其處までの處でも大變大廻りを爲なければならんやうなことが有つて慣れないものには困ることが多うがすテ。』

それより彼は開墾の困難なことや、土地に由つて困難の非常に相違することや、交通不便の爲めに折角

の收穫も容易に市場に持出すことが出来ぬことや、小作人を使ふ方法などに就いて色々と話出した、其等の事は余も札幌の諸友から聞いては居たが、彼の語るがまゝに受けて唯だ其好意を謝するのみであつた。間もなく汽車は蕭條たる一驛に着いて運轉を止めたので余も下りると此列車より出た客は總體で二十人位に過ぎざるを見た、汽車は此處より引返すのである。

たゞ見る此一小驛は森林に圍まれて居る一の孤島である。停車場に附屬する處の二三の家屋の外人間に縁ある者は何も無い。長く響いた氣笛が森林に反響して脈々として遠く消え去せた時、寂然として言ふ可からざる静さに此孤島は還つた。

三輛の乗合馬車が待つて居る。人々は黙々としてこれに乗り移つた。余も先の同車の男と共に其一に乗つた。

北海道馬の驢馬に等しきが二頭、遅ましき若者が一人、六人の客を乗せて何處へともなく走り初めた、余は『何處へともなく』といふの心持が爲たのである。實に我が行先は何處で、自から問ふて自から答へることが出来なかつたのである。

三輛の馬車は相隔つる一町ばかり、余の馬車は殿に居たので前に進む馬車の一高一低、凸凹多き道を走つて行く様子が能く見える。霧は林を掠めて飛び、道を横つて又た林に入り、眞紅に染つた木の葉は枝を離れて二片三片馬車を追ふて舞ふ。御者は一鞭強く加へて

『最早降るぞ!』と叫べんだ。

『三浦屋の前で止めてお呉れ!』と先の男は叫べんで余を顧みた。余は目禮して其好意を謝した。車中何

人も一語を發しないで、皆な屈託な顔をして物思に沈んで居る。御者は今一度強く鞭を加へて喇叭を吹き立てたので、軀は小なれども強力なる北海の健兒は大駈に駆けた。した。

林がやゝ開けて殖民の小屋が一軒二軒と現れて来たかと思ふと、突然平野に出た。幅廣き道路の兩側に商家らしきが飛び／＼に並んで居る様は新開地の市街たるを欺かない。馬車は喇叭の音勇ましく此間を駆けた。

二

三浦屋に着くや早速主人を呼んで、空知川の沿岸にゆくべき方法を問ひ、詳しく目的を話して見た。處が主人は寧ろ引返へして歌志内に廻はり、歌志内より山越えした方が便利だらうといふ。

『次の汽車なら日の暮までには歌志内に着きますから今夜は歌志内で一泊なされて、明日能くお聞合せになつて其上でお出かけになつたが可うがす。歌志内なら此處とは違つて道廳の方も居ますから、其井田さんとかいふ方の今居る處も多分解るでせう。』

斯ういはれて見ると成程さうである。されども余は空知川の岸に沿ふて進まば、余が會はんとする道廳の官吏井田某の居所を知るに最も便ならんと信じて、空知太まで來たのである。然るに空知太より空知川の岸をつたふことは案内者なくては出来ぬとのこと、而も其道らしき道の開け居るには在らずとの事を、三浦屋の主人より初めて聞いたのである。其處で余は主人の注意に従ひ、歌志内に廻はることに定めて、次の汽車まで二時間以上を、三浦屋の二階で獨りポツ然と待つこととなつた。

見渡せば前は平野である。伐り残された大木が彼處此處に衝立つて居る。風當りの強きゆゑか、何れも丸裸體になつて、黄色に染つた葉の僅少ばかりが枝にしがみついて居るばかり、それすら見て居る内にバラ／＼と散つて居る。風の加はると共に雨が降つて來た。遠方は雨雲に閉ざれて能くも見え分かず、最近に立つて居る柏の高さ三丈ばかりなるが、其太い葉を雨に打たれ風に揺られて、けうとき音を立てゝ居る。道を通る者は一人もない。

かゝる時、かゝる場所に、一人の知人なく、一人の話相手なく、旅人宿の窓に倚つて降りしきる秋の雨を眺めることは決して楽しいものでない。余は端なく東京の父母や弟や親しき友を想ひ起して、今更の如く、今日まで我を圍みし人情の如何に温かであつたかを感じたのである。

男子志を立て理想を追ふて、今や森林の中に自由の天地を求めんと願ふ時、決して女々しくはならぬと我とわが心を引立てるやうにしたが、要するに理想は冷やかにして人情は温かく、自然は冷厳にして親しみ難く人寰は懷かしくして巢を作るに適して居る。

余は悶々として二時間を過した。其中には雨は小止になつたと思ふと、喇叭の音が遠くに響く。首を出して見ると斜に絲の如く降る雨を突いて一輛の馬車が馳せて來る。余は此馬車に乗込んで再び先の停車場へと、三浦屋を立つた。

汽車の乗客は數ふるばかり。余の入つた室は余一人であつた。人獨り居るは好ましきことに非ず、余は他の室に乗換へんかとも思つたが、思ひ止まつて雨と霧との爲めに薄暗くなつて居る室の片隅に身を寄せて、暮近くなつた空の雲の去來や輪をなして回轉し去る林の立木を茫然と眺めて居た。斯る時、人は往